

7月22日(金)現在、新型コロナ新規感染者数が国内で18万人超となり、過去最高を更新。「今後も過去最多を更新していくことが予測される」という専門家の分析が新聞に掲載されていました。「第7波」の急拡大にあたり、一人ひとりの更なる注意喚起が求められます。

7月17日(日)、中学校のオープンスクールが行われました。児童・保護者とも過去最高の来校者となり、感染対策を講じた中でのにぎわいとなりました。学校紹介は中学生が司会をし、中学生自らが授業や活動の紹介をするなど、生徒主体の内容でした。参加した児童・保護者から、「わかりやすかった」、「学校の様子が見えた」、「あんな中学生になりたい」など、たくさんのお褒めの言葉をいただきました。(右は、当日の司会をした2人の中学生)



自分という作品を創り上げる

先日の中学校オープンスクールでも触れましたが、本校の教育目標(「グローバル・イノベーション・リーダーの育成」)について話すとき、今年度から“自走する生徒”を育てたいということをお話しています。なぜなら、我々教職員の役割は、生徒の自立及び自律を促すことが第一義ですが、さらに、目標に向かって自発的に走って(動き出して)いく生徒を育てることが次の役割だと思っているからです。そのためには、与え過ぎないこと、転ばぬ先の杖を持たせないことです。我々は、こうした指導や想いが教育目標の達成に繋がっていくものと信じています。自走するとは、自分自身をいかに高め、創り上げていくか、ということに繋がっていくことなのです。

さて、こうした想いの中、ある雑誌(『致知8月号』)で解剖学者・養老孟司さんの文章に出会いました。「20代をどう生きるか」というテーマの文章でしたが、“自分という唯一無二の作品を創り上げよ”というタイトルで書かれていました。文中には5つの小見出しがありました。「当たり前前の日常の脆さを知る」「自分の物差しを持つ」「勉強は自分でするもの」「五感を使うことの大切さ」「一人で何かに没頭する時間を」。それだけで十分に興味をそそられます。「20代を…」というテーマではありますが、中高生にも十分に通ずる中身だと思います。その一部を紹介します。

“自分の物差しを持たない人は、すぐに他人と比較したがる。いまはスマホを見ては「いいね!」の数に一喜一憂する人が増えたが、社会そのものが他人と比べて生きざるを得ない仕組みになってしまっている。

しかし、人というのは一人ひとり異なる存在であり、他人と比較することには何の意味も持たな

い。誰もがイチローや大谷翔平にはなれないのに、比較して自分にないものを求めるから辛くなるのだ。

他人と比べないためには、自分が夢中で打ち込めるものを見つけることである。若いうちから自分が学びたいことはどんどん学んだ方がよいし、仕事を選ぶ際も周りに流されず自分の物差しを基準にすべきである。

あなたの周りには、恐らくいろんなものが転がっているだろう。私はそこから解剖という仕事を拾った。自分の心が最も落ち着く場だったからである。何を拾うかは、自分自身が決めることである。”

自分の物差しを持ち、他人と比較することなく自分に適したものを選択していくこと。学びたいことや没頭したいことは何か、何を自分の生業にしていくのか…。こうしてこの世にたった一つしかない自分という作品を創っていくことがあなたの使命ですよ、というメッセージなのです。

中学校オープンスクールに登場した生徒たち。「うまい棒」の値上げを探究の授業で取り上げ、そのことを発表した生徒。本校の特徴的な授業や国際交流について英語で発表した生徒。そして、中学校の自主的な活動について発表した生徒。生徒たちは自分でシナリオを考え、堂々とステージに立ちました。こんな経験が自分の物差しを携えることに結びつき、自分ならこうしていきたいという選択と決断につながっていくのでしょう。

“自走する人”が、今後の社会では間違いなく求められます。そのためには、自分という作品を丁寧に創り上げることが肝心となるでしょう。そして、その作品、自分を絶えず磨き上げていくことも欠かさないようにしたいものです。